関西学院大学大学院社会学研究科
大学院 GP　共同研究班　研究合宿

2010 年 7 月 30 日（金）～8 月 1 日（日）

於　関西セミナーハウス

主催　関西学院大学 大学院社会学研究科

組織的な大学院教育推進プログラム

「社会の幸福に資するソーシャル・リサーチ教育―ソシオリテラシーの涵養」（2008-2010 年度）

＊＊＊　研究合宿の進行　＊＊＊

◆　日程　2010 年 7 月 30 日（金）　～　8 月 1 日（日）

◆　会場　関西セミナーハウス（京都　曼殊院ヨコ）

URL　http://www.academy-kansai.com/　　Tel　075 -711 -2115

※　以下の進行で、9 つのセッション（研究報告）をもちます。各報告内容の要旨などは 5 ページ以降をごらんください。研究報告はすべて「中会議室」にておこないます。

● 7 月 30 日（金）

・ 15:00　現地集合
・ 15:45　研究合宿趣旨説明など（@　中会議室）
・ 16:00　～　17:30　**報告 1　伊藤康貴**　（司会：白石）
・ 18:00　～　19:00　夕食
・ 19:00　～　22:00　**報告 2　松村　淳**、**報告 3　吹上裕樹・平田誠一郎**　（司会：山北）
・ 22:00　～　夜会（議論のつづき、研究構想、成果論集編集会議、国際ワークショップ、社会学会フォーラム打ち合わせ　など）

● 7 月 31 日（土）

・ 09:00　～　12:00　**報告 4　山森宙史**、**報告 5　福田　雄**　（司会：谷村）
・ 12:00　～　14:00　昼食　＆　ひとやすみ
・ 14:00　～　15:30　**報告 6　林　梅**　（司会：中川）（15:30～　ひとやすみ）
・ 18:00　～　19:00　夕食　＆　ひとやすみ
・ 20:00　～　21:30　**報告 7　安達智史**　（司会：川端）
・ 22:00　～　夜会（議論のつづき、研究構想、成果論集編集会議、国際ワークショップ、社会学会フォーラム打ち合わせ　など）

● 8 月 01 日（日）

・ 09:00　～　12:00　**報告 8　向井　学**、**報告 9　尾添侑太**　（司会：稲津）
・ 12:00　～　13:00　昼食
・ 解散

＊　1 セッションは 90 分（めやす：45 分発表、30 分討議、15 分休憩）

報告1　伊藤康貴　（関西学院大学大学院社会学研究科　博士課程前期課程）
「〈当事者〉を／として研究するということ ―「ひきこもり」の個人史、物語、語りを通じて」

報告2　松村淳（関西学院大学大学院社会学研究科　博士課程前期課程）
「震災復興をめぐる、建築家による建築の批評性の射程」

報告3　平田誠一郎＋吹上裕樹（関西学院大学大学院社会学研究科　研究員+博士課程後期課程）
「芸術文化における承認の再獲得 ―あるオーケストラの存廃問題をめぐって」

報告4　山森宙史（関西学院大学大学院社会学研究科　博士課程前期課程）
「マンガ読者論再考 ―読者の社会的関係を記述するために」

報告5　福田雄（関西学院大学大学院社会学研究科　博士課程後期課程）
「市民宗教論再考 ―現代社会における最大公約数的な宗教的志向性の可能性」

報告6　林 梅（関西学院大学大学院社会学研究科　研究員）
「労働移動における『留守』の仕組み ―中国東北地域朝鮮族村を事例に」

報告7　安達智史　（日本学術振興会／東北大学大学院）
「ムスリムであることとイギリス人であること ―ポスト・テロリズムにおける若者ムスリムのアイデンティティ・マネジメント」

報告8　向井学（関西学院大学大学院社会学研究科　博士課程前期課程）
「hidden curriculum の道徳性と社会性」

報告9　尾添侑太（関西学院大学大学院社会学研究科　博士課程後期課程）
「詩のボクシングの社会学的分析 ―朗読ボクサーの文化実践を通して」

ディスカッサント
五十嵐泰正（筑波大学）、川元みゆき（NPO法人子どもシェルター モモ）、塩原良和（慶應義塾大学）、南後由和（東京大学）、東琢磨（音楽評論家）、Greg Dvorak（日本学術振興会／東京大学）、友永雄吾（日本学術振興会／総合研究大学院大学）

司会
稲津秀樹、川端浩平、白石壮一郎、中川千草（以上関西学院大学大学院社会学研究科）、谷村要(大手前大学)、山北輝裕（日本大学）

報告1

〈当事者〉を／として研究するということ

―「ひきこもり」の個人史、物語、語りを通じて ―

伊藤康貴　（関西学院大学大学院社会学研究科　博士課程前期課程）

本報告の目的は、何らかの「問題」を抱える〈当事者〉が、自らが抱える課題を回顧的・反省的に社会学的な俎上に載せ、かつ同様な「問題」を抱える他の〈当事者〉を社会学的に研究する場合において、〈当事者〉の個人史（生活史）や物語、語りを用いることの有効性を、「ひきこもり」などの事例を通じて検討することである。報告者は、自らが経験した「ひきこもり」状態を自分史という形式で記述し、社会学的な分析の材料としたが、結果として「ひきこもり」の〈当事者〉は、自らの生活史を自分史として著すことによって、自らのある種豊かな経験を他者に向けて提示でき、かつ自らの抱える課題を社会学的な俎上に載せることができることを提示した。本報告においては、このような報告者の〈当事者〉としての背景を踏まえながら、個人史（生活史）と物語、語りの位相の違いに留意しつつ、〈当事者〉として〈当事者〉を社会学的に研究する場合においての、個人史（生活史）や物語、語りの意義を検討する。

参考文献

浅野智彦，2001,『自己への物語論的接近――家族療法から社会学へ』剄草書房.

井出草平，2007,『ひきこもりの社会学』世界思想社.

石川良子，2007,『ひきこもりの〈ゴール〉――「就労」でもなく「対人関係」でもなく』青弓社.

伊藤康貴，2010,「『ひきこもり』の自分史――「ひきこもり」現象の社会学的考察」関西学院大学社会学部卒業論文（2009 年度）.

伊藤智樹，2009,『セルフヘルプ・グループの自己物語論――アルコホリズムと死別体験を例に』ハーベスト社.

貴戸理恵，2004,『不登校は終わらない――「選択」の物語から〈当事者〉の語りへ』新曜社.

小林多寿子，2000,「人生の語りとナラティブ・アプローチ」大村英昭編『臨床社会学を学ぶ人のために』世界思想社：71-91.

三浦耕吉郎, 2006,「〈構造的差別〉のソシオグラフィにむけて――手紙形式による人権問題講義」三浦耕吉郎編『構造的差別のソシオグラフィ――社会を書く／差別を解く』世界思想社: 1-37.

――，2009,『環境と差別のクリティーク――屠場・「不法占拠」・部落差別』新曜社.

――，2010,「理論の外へ、もしくは〈対話〉としての社会学」『フォーラム現代社会学』9 : 60-8.

中西正司・上野千鶴子，2003,『当事者主権』岩波書店.
中野卓，1981,「個人の社会学的調査研究について」『社会学評論』125：2-12.
――，1989,『中学生のみた昭和十年代』新曜社.
――，1992,『「学徒出陣」前後――ある従軍学生のみた戦争』新曜社.
――・桜井厚編，1995,『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.
――，2003,『中野卓著作集生活史シリーズ 1――生活史の研究』東信堂.
荻野達史・川北稔・工藤宏司・高山龍太郎編，2008,『「ひきこもり」への社会学的アプローチ――メディア・当事者・支援活動』ミネルヴァ書房.
Plummer, Kenneth，1983，*Documents of Life: An Introduction to the Problems and Literature of a Humanistic Method*，George Allen & Unwin.（＝1991 原田勝弘・川合隆男・下田平裕身監訳『生活記録の社会学――方法としての生活史研究案内』光生館）.
斎藤環，1998,『社会的ひきこもり――終わらない思春期』PHP 研究所.
桜井厚，1983,「付論　生活史研究の課題」（Thomas, W.I. & Znaniecki, F 著，桜井厚抄訳『生活史の社会学――ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』御茶の水書房:243-65 所収）.
――，2002,『インタビューの社会学――ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
――・小林多寿子編，2005,『ライフストーリー・インタビュー――質的研究入門』せりか書房.
塩倉裕，1999→2002,『引きこもる若者たち』ビレッジセンター出版局．→『引きこもる若者たち』（朝日文庫）朝日新聞社.
――，2000→2003,『引きこもり』ビレッジセンター出版局．→『引きこもり』（朝日文庫）朝日新聞社.
Thomas, William Isaac & Florian Witold Znaniecki, 1918-20→1958, *The Polish Peasants in Europe and America*，Dover.（＝1983，桜井厚抄訳『生活史の社会学――ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』御茶の水書房.）
上山和樹，2001,『「ひきこもり」だった僕から』講談社.

報告 2

震災復興をめぐる、建築家による建築の批評性の射程

松村淳（関西学院大学大学院社会学研究科　博士課程前期課程）

震災復興と景観をテーマに議論を展開するつもりであるが､私の関心の中心は復興と建築家との関わりである。たしかに、復興と建築家は大いに関わっている。しかしそれは、弁護士やコンサルタントと同様の町づくりの専門家としての建築家である。たしかに、建築家による家づくりは全体の市場から見ても極めて小さい。震災を例にとっても、巨大資本と行政が主導する開発が主流になるなか、建築家が主導権を持ちながらコミットできる案件は極めて少ない。しかしながら、そのような現状の中で、それでも建築家に期待される職能があり、そしてその職能を記述分析することによって、従来の復興研究とは違ったアプローチが出来るのではないかと私は考える。その職能とは建物の耐震診断や街づくりのアドバイザーなどといった副次的な仕事ではない。あくまでも建築を作ることによって発揮される「建築家本来の」職能である。建築家の職能として第一に期待されることは質の高い建築を作り上げることである。そしてその作品に期待されるものは、施主を満足させること以外に、かれがその作品に込めた批評性である。今回とりあげる建築家による計画は、震災復興に対していかなる批評性を持ちうるのだろうか。報告の目的は、（先行研究によって明らかにされた）復興をめぐる問題に対して、建築や建築家という視点からアプローチすることを試みるものである。

建築家が被災地の只中に作り上げた建築作品を通して表現した批評性を読み取る（体感する）ことによって、批評家としての建築家の側面に、そして批評としての建築作品に光を当てたい。

参考文献

平山洋介　（2003）『不完全都市－神戸・ニューヨーク・ベルリン』学芸出版社

宮原浩二郎（2006）「「復興」とは何か――再生型災害復興と成熟社会」、関西学院大学大学院社会学研究科21世紀プログラム「人類の幸福に資する社会調査」の研究【編】2006年　『先端社会研究　第5号』

報告3

芸術文化における承認の再獲得

― あるオーケストラの存廃問題をめぐって ―

平田誠一郎（関西学院大学大学院社会学研究科　研究員）
吹上裕樹（関西学院大学大学院社会学研究科　博士課程後期課程）

2008 年に就任した大阪府の橋下徹知事は、赤字を抱えた府の財政健全化に乗り出したが、その政策の一環として発表されたのが、府が基金を提供していたオーケストラ（大阪センチュリー交響楽団）への補助金打ち切りであった。大阪府からの補助が失われることによって同交響楽団は存亡の危機に立つこととなり、現在も民営化に向けたスポンサー探しが続いている。

報告者たちは、このオーケストラ存廃問題を事例として、「クラシック音楽」という文化実践にかつて向けられていた社会的承認が失われ、新たに承認を獲得せねばならない立場におかれていることを論じるべく、研究計画を立てている。本報告では、そのための基礎的な作業として、事例の概要、オーケストラ一般の財政問題、オーケストラ存廃問題の過去事例を述べた上で、今回の問題が音楽関係者やファン、大阪府民に巻き起こした議論を追うことで、今後の研究における論点を提示したいと考えている。

参考文献

大木裕子, 2004,『オーケストラのマネジメント　芸術組織における共創環境』文眞堂.
宮本直美, 2006,「文化の公的支援とポピュラー文化」『ポピュラー音楽研究』Vol.10, 日本ポピュラー音楽学会,pp.153‐162.
————, 2008,「正統な音楽・非正統な音楽―文化政策の公的承認機能」東谷護編,『拡散する音楽文化をどうとらえるか』勁草書房, pp.79‐105.
武川正吾, 2007,『連帯と承認――グローバル化と個人化のなかの福祉国家』東京大学出版会.

報告4

マンガ読者論再考
― 読者の社会的関係を記述するために ―

山森宙史（関西学院大学大学院社会学研究科　博士課程前期課程）

「マンガ読者とその共同体はいかなる存在か」。この問いに対して、古くは、鶴見俊輔や石子順三に代表される大衆文化論的視点に始まり、村上知彦による＜私語り＞論的視点、そして現在においても夏目房之介や伊藤剛らによるマンガ表現論などが積極的にこの問題に対峙している。しかし、いずれの方法も「社会に生きる読者」からは乖離していってしまうという印象を免れ得ない。このような問題に対し、近年では中野晴行による産業論的視点に立ったメディア・オーディエンス論からのアプローチが期待されているが、そこにも送り手側の鏡像であるとともに、世代還元的な読者像という問題が横たわっている。本発表では、これら先行するマンガ読者論の問題点を明らかにするとともに、和田敦彦と石田佐恵子らによって展開された、「間メディア的な読者像」と「消費行為（購入/読書/所有）からの読者類型」という二つの議論に立脚しながら、J.ボードリヤールの消費社会論を援用した、「マンガ読者」と「マンガ読者共同体」を分析するための新たな枠組みの可能性に向けての試論である。

参考文献

J.ボードリヤール，1980 年,『物の体系』法政大学出版局

伊藤剛，2004 年,『テヅカ・イズ・デッド：ひらかれたマンガ表現論へ』NTT 出版.

中野晴行，2004 年,『マンガ産業論』筑摩書房

和田敦彦，2002 年,『メディアの中の読者：読者論の現在』ひつじ書房.

石田佐恵子，2001 年,「誰のためのマンガ社会学―マンガ読者論再考」『マンガの社会学』世界思想社.

報告5

市民宗教論再考

― 現代社会における最大公約数的な宗教的志向性の可能性 ―

福田雄（関西学院大学大学院社会学研究科　博士課程後期課程）

本発表は、「災禍の儀礼」という事例研究を進めるに先立ってその理論的枠組を構築するために行う作業の一貫である。災禍の儀礼とは、慰霊・追悼・顕彰など公的な場において行われる出来事の後に行われる儀礼のセットである。多種多様な背景をもつ人々が特定の要因によって無差別に死傷するこのような事例において、その後行われる儀礼は、その社会の「最大公約数的な宗教的志向性」が様々な象徴と儀礼を通して表出され、解釈され、強化される場としてみることができる。本発表ではこれらの社会現象を宗教社会学の立場から分析するにあたり、「市民宗教」（Bellah）、「公共宗教」（カサノヴァ、藤本）、「文化の深層」（津城）、「民俗宗教」（池上）、「Implicit spirituality」（稲場）など、いくつかの理論的枠組を検討する。これらを批判的に検討するなかで、これまで研究が十分にされてこなかった災禍の儀礼という普遍的に起こる社会現象を捉える視角を得ることを試みる。

参考文献

P. Post, R.L. Grimes, A.Nugteren, P. Pettersson & H. Zondag, Disaster Ritual: exploration of an emerging ritual repertoire, Peeters Publishers (2003)

Robert N. Bellah, Civil Religion in America, in *Beyond Belief –Essays on Religion in a Post-Traditional World*, Harper & Row, 1970 （「アメリカの市民宗教」『社会変革と宗教倫理』未来社, 1973）

藤本龍児『アメリカの公共宗教　―多元社会における精神性』NTT 出版（2009）

津城寛文『日本の深層文化　―三つの深層と宗教』玉川大学出版会（1992）

池上良正「宗教学の方法としての民間信仰・民俗宗教論」『宗教研究』第 325 号 特集「民間信仰」研究の百年（2000）

Keishin Inaba, Altruism, Religion and Implicit Spirituality in Japan, *The Proceedings of the 1st International Academic Interchange Meeting between the Graduate School of Human Development & Environment (HDE) Kobe University and the Institute of Education (IOE), University of London The Contribution of Universities to Civil Society* (Graduate School GP Program Graduate School of Human Development & Environment Kobe University), 2008

Anne Eyre, In remembrance: post-disaster rituals and symbols, *Australian Jounal of Emergency Management* Vol. 14, No. 3 Spring, 1999

報告6

労働移動における『留守』の仕組み

― 中国東北地域朝鮮族村を事例に ―

林 梅（関西学院大学大学院社会学研究科　研究員）

本稿は、中国朝鮮族の越境する労働移動に関わる生活世界を、当事者視点に近づく質的調査によるものであり、とくに、彼ら／彼女らの地元での「留守」の仕組みを取り上げ、既存の朝鮮族の移動研究に関する新たな視座を提示することが目的である。これまで朝鮮族の労働移動は、経済目的の行為という文脈からとらえられ、多くの研究は朝鮮族コミュニティやアイデンティティの変容の分析に中心が置かれていた。しかし本稿では移民の生活世界をより具体的な諸実践に着目することで、深層から、より体系的にとらえるための分析をおこなった。労働移動は、原住地における生活を取り巻く環境の不安定に端を発しているが、移住先では、構造的・社会的不安からコミュニティが形成され、異文化の利用など存続の可能性を開拓する人々の実践を引き起こす。一方、実践の失敗や不効率といった移住先の不安要素に備えた安全弁として原住地における土地運営やそのための工夫が持続されている生活実践として、「留守」というシステムも実践されている。これらの実践の記述と分析から、朝鮮族社会における移民の生活世界がもつ意味を考えたい。

参考文献

ジョン・アーリ　2007　『社会を超える社会学―移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版局。

東美晴・中村則弘　2009　『移動する人々と中国に見る多元的社会―史的展開と問題状況』明石書店。

クォン・テファン　2007　「見通しが立たない朝鮮族の将来」『ディアスポラとしてのコリアン　－　北米、東アジア、中央アジア』新幹社。

松田素二　2009　『日常人類学宣言！―生活世界の深層へ／から』世界思想社。

バーナード・オリビエ　2007 「中国北東部コリアンの政治的手段としての民族性」『ディアスポラとしてのコリアン　－　北米、東アジア、中央アジア』新幹社。

佐々木衛　2007　「都市移住者の社会ネットワーク」『越境する移動とコミュニティの再構築』東方書店。

鄭雅英　2008 「韓国の在外同法移住労働者―中国朝鮮族労働者の受け入れ過程と現状分析」『立命館国際地域研究』第 26 号、77-96 頁。

李勁松　2006　『国境を超える中国朝鮮族の移動と朝鮮族コミュニティの再構築：ソウル・東京における朝鮮族移動者を中心に』富士ゼロックス小林節太郎記念基金。

李　愛俐娥　2006「ロシア沿海州地域における中国朝鮮族の現状」『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』アジア経済文化研究所。

白銀珠　2006「ニューヨークにおける中国朝鮮族」『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』アジア経済文化研究所。

Alejandro Portes, 2009, ‘migration and development : reconciling opposite views ’, Ethnic and racial Studies Vol. 32, NO. 1, January 2009, pp.5-22

許明哲　2009　『開放化時代朝鮮族共同体の進路』延辺大学出版社。

延辺大学朝鮮韓国研究中心　2009　『延辺大学設立 60 周年国際学術大会論文集』

韓景旭　2001　『韓国・朝鮮系中国人＝朝鮮族』中国書店。

李承律　2008　『東北アジア時代と朝鮮族』博英社。

報告 7

ムスリムであることとイギリス人であること

―ポスト・テロリズムにおける若者ムスリムのアイデンティティ・マネジメント―

安達智史　（日本学術振興会特別研究員 PD／東北大学大学院）

1980 年代以降、宗教としてのイスラムはキリスト教文化に基づく西欧社会に大きなインパクトを与えている。とりわけ、2001 年の 9.11 のテロリズム以降、イスラム・コミュニティやムスリムは、その規模の増大にともない、社会に大きな不安をもたらすようになっている。その不安は、一部の政治家やマス・メディアの報道において表明される、イスラムへの偏見や嫌悪（Islamophobia）に現れている。イスラムと西欧社会の「文明の衝突」が煽られ、また、若者ムスリムがテロ行為などの過激主義への志向を有していることが指摘されている。だが、そのような言説は、彼女／彼らの実像をとらえたものであろうか。本報告では、イギリスにおけるインタビュー調査をもとに、いかに若者ムスリムが、「ムスリムであること」と「イギリス人であること」との関係をとらえ、自身のアイデンティティと社会との関係をマネジメントしているかについて明らかにする。

References

Afshar, H. (1989) “Gender Roles and the ‘Moral Economy of Kin’ among Pakistani Women in West Yorkshire”, *New Community* 15: 211-225.

Ahmad, A. S. (1992) *Islam in the Age of Postmodernity*. London: Routledge.

Ahmad, A. S. and H. Donnan (eds.) (1993) *Islam, Globalization and Postmodernity*. London: Routledge.

Ahmad, F. (2001) “Modern Traditions? British Muslim Women and Academic Achievement”. *Gender and Education* 13(2): 137-152.

Ahmed, S. (2009) *Seen and Not Heard: Voices of Young British Muslims*. Leicestershire: Policy Research Centre.

Alam, M. Y. (2006) *Made in Bradford*. Pontefract: Route.

Allen, C. (2005) “From Race to Religion: The New Face of Disrimination”, in T. Abbas (ed.) *Muslim Britain: Communities under Pressure*. New York: Zet books, Pp 49-65.

Ameli, S. R. (2002) *Globalization, Americanization and British Muslim Identity*. London: Islamic College for Advanced Studies Press.

Ansari, H. (2002) *Muslims in Britain*. London: Minority rights Group International.

Archer, L. (2009) “Race, ‘Face’ and Masculinity: The Identities and Local Geographies of Muslim Boys”, in P. Hopkins and R. Gale (eds.) *Muslims in Britain: Race, Place and Identities*. Edinburgh:

Edinburgh University Press, Pp. 74-91.

Barber, B. (1996) *Jihard vs. McWorld: How Globalism and Tribalism are Reshaping the Wprld*. New York: Ballantine Books.

Baringhorst, S. (1992) "Cultural Pluralism and Anti-Discrimination Policy", in Thränhardt, D. (ed.) *Europe, A New Immigration Continent: Policies and Politics in Comparative Perspective*. Münster: Lit Verlag, Pp. 177-196.

Beck, U. (1986) *Risk Society: Towards a New Modernity*. London: SAGE Publications.

Bhopal, K. (1997) *Gender, "Race" and Patriarchy: A Study of South Asian Women*. Aldershot: Ashgate.

Blair, T. (2006) "The Duty of Integration: Shared British Values". 01 August 2009. Available at: http://www.number10.gov.uk/Pag e10563.

Burlet, S. and H. Reid (1998) "A Gendered Uprising: Political Representation and Minorities". *Ethnic and Racial Studies* 21(2): 270-87.

Campaign Against Racism and Fascism (2001) "The Summer of Rebellion: Special Report". *IRR News*. 30 August 2007. Available at: http://www.irr.org.uk/2001/august/ak000001.html

Coventry City Council (1986) *Coventry Trends: A Statistical Digest of Ethnic Minority Population*. Coventry: City of Coventry.

Department for Education and Science (1985) *Education for All: Final Report of the Committee of Inquiry into the Education of Children from Ethnic Minority Groups*. London: HMSO.

Durkin, K. (2005) "Gender Roles in Society", in M. Barrett and E. Buchanan-Barrow (eds.) *Children's Understanding of Society: Studies in Developmental Psychology.* New York: Psychology Press, Pp. 135-168.

Dwyer, C. and B. Shah (2009) "Rethinking the Identities of Young British Pakistani Muslim Women: Educational Experiences and Aspirations", in P. Hopkins and R. Gale (eds.) *Muslims in Britain: Race, Place and Identities*. Edinburgh: Edinburgh University Press, Pp. 55-73.

ETHNOS (2005) *Citizenship and Belonging: What is Britishness?*. London: Commission for Racial Equality.

Fulat, S. (2005) "Caught between Two Worlds: How Can the State Help Young Muslims?", in M. Bunting (ed.) *Islam, Race and Being British*. London: Guardian in Association with Barrow Cadbury Trust.

Giddens, A. (1991) *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Modern Age*. Oxford: Blackwell Publishing.

—— (1994) "Living in a Post-Traditional Society", in U. Beck, A. Giddens and S. Lash (eds.), *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*. Cambridge: Polity Press, Pp. 56-109.

Harvey, D. (1989) *The Condition of Postmodernity*. Oxford: Blackwell.

Hilo, D. (1992) *Black British, White British*. London: Paladin.

Home Office (2001) *Community Cohesion: A Report of the Independent Review Team*. London: Home

Office.

Hussain Y. and P. Bgguley (2007) *Moving on up: South Asian Women and Higher Education*. Stoke-on-Trent: Trentham Books.

Jacobson, J. (1998) *Islam in Transition: Religion and Identity among British Pakistani Youth*. London: Routledge.

Knott, K. and S. Khokher (1993) "Religion and Ethnic Identity among Young Muslim Women in Bradford", *New Community*. 5: 99-108.

Kundnani, A. (2001) "From Oldham to Bradford: The Violence of the Violated". *IRR New*, 15 July 2007. Available at: http://www.irr.org.uk/2001/october/ak000003.html.

Lewis, P. (2007) *Young, British and Muslim*. London: Continuum International Publishing Group.

Luhmann, N. (1996) *Social Systems*. Stanford: Stanford University Press.

McGhee, D. (2008) *The End of Multiculturalism?: Terrorism, Integration and Human Rights*. Berkshire: Open University Press.

McLuhan, M. (1964) *Understanding Media: The Extensions of Man*. New York: McGraw-Hill.

Maxwell, R. (2006) "Muslims, South Asians and the British Mainstream: A National Identity Crisis?". *West European Politics* 29(4): 736-756.

Meyrowitz, J. (1985) *No Sense of Place: The Impact of Electronic Media on Social Behavior*. New York: Oxford University Press.

Phillips, T. (2005) "After 7/7: Sleepwalking to Segregation". 2 January 2010, Available at: http://www.humanities.manchester.ac.uk/socialchange/research/social-change/summer-workshops/documents/sleepwalking.pdf

Rampton, A. (1981) *West Indian Children in Our Schools*. London: Her Majesty's Stationery Office.

Sanghera, G. and S. Thapar-Björkert (2007) "'Because I'm Pakistani…and I'm Muslim...and I am Political' – Gendered Political Radicalism: Young Feminities in Bradford", in T. Abbas (ed.) *Islamic Political Radicalism*. Edinburgh: Edinburgh University Press, Pp. 173-191.

Taylor, C. (1991) *The Malaise of Modernity*. Cambridge: Harvard University Press.

Thoms, D. and T. Donnelly (2000) *The Coventry Motor Industry: Birth and Renaissance*. Hampshire: Ashgate Publishing Ltd.

Yuval-Davis, N., F. Anthias and E. Kofman (2005) "Secure Borders and Safe Haven and the Gendered Politics of Belonging: Beyond Social Cohesion". *Ethnic and Racial Studies* 28(3): 513-535.

Warrington, M., M. Younger and J. Williams (2000) "Student Attitudes, Image and the Gender Gap". *British Educational Research Journal* 26(3): 393-407.

報告8

hidden curriculum の道徳性と社会性

向井学（関西学院大学大学院社会学研究科　博士課程前期課程）

学校教育で学ばなければならないとされているものの中に、数学や英語といった各教科のほかに、習得すべき行為／態度が存在する。「挨拶をする」や「決められた課題をやり遂げる」といったものである。こうした行為／態度は、日本の教育において、学習指導要領における道徳教育の項目に基礎付けられているといえるだろう。そしてそれらは、就職／進学に利用される内申書に影響するという意味において、学校における hidden curriculum として定義することができる。

こうした hidden curriculum の基礎となる道徳教育の政策は、近年、心理主義化しており、そうした「心」を画一的に教育することを問題にした指摘はいくつかなされている。

しかし本発表では、多様性が増した現代社会の中で、多元的アイデンティティを基に生活する若者にとって、画一的な「心」を教育することがどういった効果をもたらしているのか、また、なぜ画一的な「心」が教育政策に求められるようになったのか、といった問題関心を基に発表する。

参考文献

児美川孝一郎　2002　「抗いがたき“磁場”としての新自由主義教育改革」　現代思想 vol30-05,68-179

三宅晶子 2003 「「心のノート」のテクスト・イメージ分析」 現代思想 vol31-04 122-138

大内裕和 2001 「象徴資本としての「個性」」 現代思想 vol29-02,86-101

小沢牧子 2005 「「心の教育」が意図するもの」 現代思想 vol33-04,166-174

臨時教育審議会 1985 『臨教審だより』 no.1～5

佐々木賢 2007 「教育と心性操作」 現代思想 vol35-05,116-140

佐々木賢 2002 「教育ネオ・リベラリズムの正体」 現代思想 vol30-05,180-193

柴野昌山 1982 「知識配分と組織的社会化－「カリキュラムの社会学」を中心に－」 教育社会学研究 第 37 号 5-19

高橋勝 2002 『文化変容の中の子ども　経験・他者・関係性』 東信堂

寺脇研 2008 『さらばゆとり教育　学力崩壊の「戦犯」と呼ばれて』 光文社

報告9

詩のボクシングの社会学的分析

―朗読ボクサーの文化実践を通して―

尾添侑太（関西学院大学大学院社会学研究科　博士課程後期課程）

社会学においてコミュニケーションは常に問題を抱えたものとして設定されてきた。このような傾向は、人間社会にとってあるべき望ましいコミュニケーション像と人間相互理解を結びつけながら、コミュニケーションを画一化させていく。そのため、もともとコミュニケーションが包含していた多様性は排除されてきた。しかし、コミュニケーションはまさにその多様なあり方において、人間社会をこれまで発展させてきたのである。本稿ではそのような問題関心のもと、「詩のボクシング」での参与観察から「朗読ボクサー」と呼ばれる大会に参与する人びとの語りを通し、大会が朗読ボクサーにとってどのような場として捉えられているかを明らかにする。詩のボクシングの独自性を「遊び」「自己表出」「現れ」という社会学的概念を用いて記述・分析し、多様なコミュニケーションの在り方の可能性を探る。

参考文献

Arendt, Hannah., Jerome Kohn ed., 2005, *The Promise of Politics :* Schocken Books　（＝2008，高橋勇夫訳『政治の約束』筑摩書房）

長谷正人・奥村隆編、2009『コミュニケーションの社会学』有斐閣アルマ

橋本摂子，2006,「公共性とコミュニケーションーアーレントとハバーマスにおける言論の政治―」『年報社会学論集』第 19 号，関東社会学会

亀喜信、2010、『ハンナ・アレント――伝えることの人間学』世界思想社

楠かつのり，2002,『「詩のボクシング」って何だ！？』新書館

――――，2005,『詩のボクシング　声と言葉のスポーツ』東京書籍

松田恵二，2001,『交叉する身体と遊び』世界思想社

宮原浩二郎，1998,『言葉の臨床社会学』ナカニシヤ出版

――――，2005,『論力の時代　言葉の魅力の社会学』勁草書房

中井孝章，2003,『学校教育の時間論的転回』渓水社

――――，2004,『言葉遊びの教育記号論』三学出版

櫻井龍彦，2001、「対面性の変容－近代社会における相互行為・空間・コミュニケーション－」『年報社会学論集』第 14 号，関東社会学会

杉本厚夫編，1997,『スポーツファンの社会学』杉本厚夫編（世界思想社）

竹内敏晴，1975,『ことばが劈かれるとき』思想の科学社
————，2007,『声が生まれる　聞く力・話す力』中央公論新社
吉本隆明，2002,『ひきこもれ　一人の時間をもつということ』大和書房
————，2006,『詩とはなにか　世界を凍らせる言葉』思潮社４

Appendix 1　共同研究夏場所　報告心得

白石@ 大学院 GP 事務室

１．　目的

報告者が「これから書くもの」の構想・草案を口頭発表し、ディスカッサントとオーディエンスとともに構成・議論内容などを練り上げていく。

２．　これから書くもの

投稿論文、成果論集（次ページ参照）原稿、修士論文、そのほか今年度中にパブリッシュする予定のもの。ただし、書評論文のネタで報告の場合は、合宿までに対象図書を読み込んでおくこと（「まだあまりちゃんと読んでないんで…」というのは、NG）。

３．　報告の形式

Power Point 使用可（PC やプロジェクターはある）。配布資料は、レジュメか Power Point のスライド一覧を、事前に 25 部印刷しておくこと（会場にはプリンターはなく、コピー機は有料）。

セッションは 90 分。休憩 15 分をのぞく報告者ひとりの持ち時間 75 分のうち、発表時間 45 分、討論時間 30 分がめやすだが、発表 30 分、討論 45 分などでも OK。

４．　報告の要領

4-1.　どうするつもりか予定を明言

報告の冒頭には、これからどうしたいネタであるのかを言う。たとえば、「この報告内容は、2011 年 1 月締め切りの修士論文の中間報告です」とか、「この報告内容は、今年中に『ソシオロジ』に投稿予定のものです」など。そうしたほうが、聴く側としてもサポートしやすいし、発表する側の目的意識も具体的になって、生産的。

4-2.　こだわりどころを隠さない

もっともらしい完成品をプレゼンすることに拘泥する必要はない。とにかく自分のテーマやトピックに対するこだわりどころを隠さずに、参加者に分かるように説明するよう努めること。

4-3.　悩みどころも隠さない

アドバイスを受けたい点があればそれを具体的に、どこの、なんに関してか、はっきりさせること（おもに「××に関しての文献の紹介」、「イントロと議論部分のつくりかた」などかと思われる）。「どうすればいいですかねー」という丸投げは、双方にとって意味なし！

以上

Appendix 2　**共同研究成果論集について**

2010 年 6 月 14 日

関西学院大学大学院社会学研究科
大学院 GP 事務室

本研究科大学院 GP では、共同研究「東アジアのストリートの現在」および「〈承認〉の社会学的再構築」の成果論集の刊行を企画しております。両研究班に関わった本研究科大学院生・研究員が執筆するほか、開催した研究会に報告者やコメンテーターとしてご登壇いただいた学外の大学院生・若手研究者の方々にもご執筆いただきたいと思います。

全体で 15-20 本ほどの論稿を掲載する予定です。大まかではありますが、編集方針として、以下のようなことを考えています。

＊【内容】　参加された研究会のテーマから、大きく外れない範囲でのご執筆。かならずしも学術ジャーナル論文的な論述形式をとったものでなく、研究構想、資料的価値のあるものの発表などいわゆる「研究ノート」的なものも歓迎します。

＊【分量】　8,000 字以上（20,000 字を超えそうな場合は別途ご相談ください）。図表は、必要最低限のものにとどめてください。

＊【査読】　「査読無し」ですが、編集部とのいくらかのやりとりはありますので、ご承知おきください。本誌編集委員会は、寄稿者がさらに改稿ののち他の媒体に投稿・公刊することを妨げるものではありません（但し二重投稿禁止規定などをもつ媒体に投稿する場合は、先方の判断にゆだねられることにご留意ください）。

＊【発行形式】　350 部あるいは 400 部、印刷・製本し、『KG/GP 社会学批評』通常号をお送りしている送付先にお送りします。（執筆してくださった方々には 5 部ずつお送りする予定です。）通常号とちがって、web サイト上での内容公開はいたしません。

＊【締め切り】　原稿提出の最終締め切りは 10 月 29 日（金）とします。

謹白

大学院 GP 事務室（担当：川端・白石）

関西学院大学大学院社会学研究科大学院 GP 共同研究班研究合宿
要旨集

2010 年 7 月 24 日　発行
（2010 年 7 月 28 日　若干の改訂）

企画
関西学院大学大学院社会学研究科大学院 GP 事務室
共同研究「東アジアのストリートの現在」（代表：　稲津秀樹、谷村要）
共同研究「〈承認〉の社会学的再構築」（代表：　吹上裕樹、平田誠一郎）

連絡先
〒662-8501　西宮市上ヶ原一番町　1－155
gp-office@kwansei.ac.jp